

Title	言語の非恣意的特性としてのダイクシスについて
Sub Title	Deixis : A case for non-arbitrariness in language
Author	井上, 逸兵(Inoue, Ippei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1988
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.53, (1988. 7) ,p.45- 25
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00530001-0245">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00530001-0245</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 言語の非恣意的特性としての ダイクシスについて

(Deixis: a case for non-arbitrariness in language)

井上逸兵

## 1. 序

場所のダイクシス (place deixis) は発話内容が話し手や伝達行為を取り巻く現実の状況に結びついた言語表現の特質で、言語内的世界と言語外的世界のいわば橋渡的存在となっている。本論では、これまで場所のダイクシスに関して多くの研究がなされながら見落とされていた、いくつかの特性を英語と日本語を中心に論じ、部分的には他の言語にもふれてその普遍性にも言及したい。

言語は話者なしでは存在しえない。そのまったく当然の事実を要因として、言語には話者が言語的世界の中心となる特性が見いだされる。ダイクシスの言語体系における成立様式は様々だが、その「話者中心性」がかなり普遍的に、そして極めて顕著にダイクシスの中に見出される。「話者中心性」の言語事象における現われ方(特に非近接表現の無標性について)、ダイクシスの感情的な用法、ダイクシスを持つ動詞 (deictic verbs) を含むイディオムの非認知的含意関係などに考察をくわえてみたい。

## 2. 空間指示の認知的意味

英語の指示代名詞 ‘this’ は話し手の手が届くところにあるか、そのように感じられるもの、あるいは話し手の勢力範囲にあるもの、‘that’ はそういう範囲の外にあるものを指すのに用いられる<sup>1)</sup>。つまり英語は近接 (proximal) / 非近接 (distal) という二分法の指示体系を持っているが、一

方日本語の方はいわゆる「コ・ソ・ア」の三分法であるからソシユールの「価値 (valeur)」の概念から考えると、‘this’=「コ」系、‘that’=「ア」系という単純な等式は成り立たない<sup>2)</sup>。

大槻 (1900) は「近称 (コ系)」は近いもの、「中称 (ソ系)」はやや離れたもの、「遠称 (ア系)」は遠いものという見方をしている。伝統的な「近称」「中称」「遠称」という用語はおそらくこのような見方からきたものと考えられるが、今日ではこの区分はやや単純すぎるというのが通説となっている<sup>3)</sup>。佐久間 (1951) はコ系は話し手の勢力範囲内のもの、ソ系は聞き手の勢力範囲、ア系はそれ以外のものを指示するとしている。つまり、距離ではなく関与者を中心にダイクシスの体系が成立しているという見方だが、今のところこのような見解が一般的で、少なくとも東京方言に関しては正しいといえるだろう。

簡単に比較すると、英語にも日本語にも話し手の勢力範囲内のものを指示する近接の指示詞とそれ以外のものを指示する非近接の指示詞があり、三分法の日本語の場合はさらに後者に聞き手の勢力範囲のものを指示する指示詞が加わるという図式が成り立つことになる。

### 3. 非近接表現の無標性について

指示詞はそれを持つ言語の指示領域において等価に対立しているわけではない。それぞれの指示詞の指示領域の空間的な広さや話し手からの相対的な距離は無論異なっているが、ここでは指示の性質そのものを問題として考察してみよう。

二分法をとる言語において、近接の指示詞と非近接の指示詞は「近い」/「遠い」、「話し手の領域」/「それ以外の領域」という単純な対立にとどまらず、多くの言語で後者が中立化・不定化・無標化される現象が見られる。言語の二項対立に、ひとつの項がもう一方の項との対立が中和されて中立的な無標項となる現象があるが<sup>4)</sup>、近接 / 非近接の指示詞のいくつかの用例において、このように非近接の指示詞が不定的になるのはそれと類似性があるように思われる。文脈を無視した単語のみの対立では見落とし

がちな現象である。

そのような現象が顕著に見られる二分法の英語を見てみよう。もっともはっきりしているのはいわゆる ‘There is / are’ の構文である。

- (1) *There* is a hippopotamus in the zoo.
- (2) *Here* is a hippopotamus.

(2) の ‘Here’ には「ここに」という指示的な機能があるが、(1) の ‘There’ は指示的な意味を持たない。(cf. *There* is a hippopotamus *here*.) フランス語との対照性を見ればさらにそれがはっきりする。

- (3) *Voici* un cahier.
- (3)’ *Here* is a notebook.
- (4) *Voilà* un cahier.
- (4)’ *There* is a notebook *there*.

フランス語の ‘Voilà’ という表現には指示的な機能が備わっているため、それと同じように英語で表すには (4)’ の二つめの ‘there’ が必要であり、明らかに最初の ‘There’ は指示性に関して無標項となっていることがわかる。

さらに次の例を見ても同じことが言える。

- (5) *In those days* there used to be an old pine tree here.
- (6) *These days* students are far more music-minded than they used to be.

(5) (6) の斜体部はそれぞれ「当時」、「近ごろ」ぐらいの意味の慣用句である。英語では時を表す表現で、

- (7) in the morning / this morning / \*in this morning<sup>5)</sup>
- (8) at night / last night / \*at last night

などの現象が見られる。これはつまり ‘in the morning’, ‘at night’ といった、いわば無標的な表現に限定的な(有標的な) ‘this’, ‘last’ などの

修飾語句がつくと前置詞がとれてしまうものがあるということである。これを (5) (6) の例の対立で考えてみると、前置詞の有無から ‘these’ に対して ‘those’ は無標項であることになる<sup>6)</sup>。

また英語では指示詞の ‘that’ が接続詞や関係詞となっているのも非近接の ‘that’ が無標項となっていることの表れと考えることも可能である。次の (9) (10) には一種の形式的な対照性があるが、(10) の方が、ストレスの強さや (9) の ‘that’ の省略の可能性から考えると有標的である。

- (9) The reason is *that* we can't see the hippopotamus.  
(10) The reason is *this*: we can't see the hippopotamus.

これに関連して次の (11) (12) の ‘those’, ‘that’ のように非近接表現が漠然と「人」、「もの」、「こと」を表すことがある。

- (11) There are *those* who would not raise a finger to help the poor.  
(12) *That* which upsets me most is his manner.

他の言語の例をいくつか見てみよう。フランス語は全般に近接 / 非近接の対立が弱い言語である。‘ceci’, ‘cela’ にはそれぞれ近接 / 非近接の対立があるが、英語の (11) (12) の ‘those’, ‘that’ に相当する表現としては ‘ce’ がある。

- (13) N'achetez pas ce qui est trop cher.

‘ce’ は日本語の「それ」などに比べても指示機能が低く、無標である度合いが高い。興味深いのは ‘ceci’ / ‘cela’ の対立に関して非近接の ‘cela’ は単独で用いられるとその対立が中和され、近いものも指しうることである。つまり ‘cela’ の方はいわば遠近両用で、それが簡略化された ‘ça’ もさらに中立的に表現となる。

近接「这」 / 非近接「那」の二分法をとる中国語には次のような例がある。

(14) 我们那儿的风景也是这么样。(私達の方の風景もこんなふうです。)

ここでも (14) の「那儿的」は中立的無標項となる。この文の発話者の眼前には「私たち」ののところとは似ているが、別の風景が広がっている。その意味では非近接性が保持されているが、この「那儿」という表現は「~のところ」ぐらいの意味の慣用表現で、指示機能は低く、英語の‘that’に近い。

形態的に近接の指示詞が有標となる言語もある。ロシア語の近接の指示詞は主格で男性形 *этот*, 中性形 *это*, 女性形 *эта* で、非近接はそれぞれ *той*, *то*, *та* であるから、活用のなかで若干の母音の違いはあるものの、総じて ‘*э+X*’ / ‘*X*’ という対立で、近接表現は文字どおり有標である。同じスラヴ語派のチェコ語の ‘*ten / tento*’ (m.), ‘*ta*’ / ‘*tato*’ (f.), ‘*to / toto*’ (n.)<sup>7)</sup> も同様に後者が近接表現で ‘*to*’ という標識がつく。

一方の三分法をとる言語では近称 (proximal)・中称 (medial)・遠称 (distal) のうち<sup>8)</sup> 文字どおり中称が中立化・不定化・無標化するものが多い。まず英語の ‘that’ と比較して日本語の例を見てみよう。

(15) The population of Tokyo is larger than *that* of Osaka.

(16a) 東京の人口は大阪の {それ / \*これ / \*あれ} より多い。

(16b) 東京の人口は大阪よりも多い。

(15) の ‘that’ は前方照応だが、これはいくら指示されるものが近くても ‘this’ には置き換えられないから代示 (substitution) と呼んだほうがいいだろう。日本語を見てみると (16b) は全く自然だが、(16a) は少なくとも外国語を学習したことのない者や外国語を翻訳したものを読み慣れていない者にはやや奇異に感じられるだろう。注目すべきことは (16a) において「これ」「あれ」は容認不可能であることだ。つまり、日本語では英語の無標の ‘that’ に「それ」またはゼロで対応するのである。逆に見れば日本語の中称ソ系が相対的に指示性の低い無標項であることがわかる。

次に「そこ」について検討してみたい。(17) (18) の「そこら」「そこ」も

不定というべき表現で、「ここ」「あそこ」に比べて指示性が弱く、無標項といえる。

- (17) 彼ぐらいの力量の者なら {そこらじゅうに / \*こらじゅうに / \*あそこらじゅう} にいる。
- (18) 出かける前には必ず {どこそこ / \*どこここ / \*どこあそこ} に行くと言っていきなさい。

また、「そこ」と「あそこ」とにおいては先にロシア語とチェコ語で見たような形態上の対立がある。(「そこ」/「あ」+「そこ」<sup>9)</sup>)

二分法をとる多くの言語で非近接表現が指示機能の低い無標項となり、三分法をとる言語では中称が無標化することを見た。いずれにしても近接が不定化・無標化することがないのは、単純化を恐れずに言えば、物理的・心理的に遠いものより近いものに対するほうが話者の関心の度合いが高いという話者中心の構図がダイクシスに現われているからであると考えられる。中称が文字どおり中立的な表現になることは直観的に理解できるが、ではその理由は何かという問題に関しては英語の ‘this and that’, ‘here and there’, 日本語の「あれこれ」, 「あちらこちら」などが不定的な表現となることをその延長線上で考えることがその解決の糸口となるであろう。英語には中称というものはないが、遠近の両方を示すことで「遠」と「近」との対立が相殺され、「中」の概念が不定性を表現していると考えられる。

- (19) “What have you been doing since I last saw you?”  
“Oh, *this and that*.”

(19) の ‘this and that’ は具体的に何かを指示しているわけではなく、むしろ質問に対して答えをはぐらかしてきえている。同様の表現はドイツ語の ‘dieses und jenes’, 朝鮮語の ‘ikəsjəkəs’ (「이것저것」), イタリア語の ‘questo e quello’ など、かなり多くの言語で見られるが、興味深いのはフランス語で、これに相当する表現として ‘ça et là’ がある。‘ça’ は前

にも触れたように遠近両用ではあるが非近接の表現でもあるので、‘là’ という非近接の表現とは対立の度合いが低い。また英語の ‘They were talking about *this and that.*’ にフランス語のように ‘Ils parlaient de chose et d’autres.’ という形式でが対応する言語もある。

#### 4. 場所のダイクシスを含んだ時の表現

場所を表す表現と時の表現との平行性は、我々がほとんど意識しないほど言語表現に定着している。Piaget & Inhelder (1963), Traugott (1975) などは空間表現が時間表現よりも基本的であることを明らかにしているし、Tsuji (1987) は、抽象性の高い「時間」を理解し表現するには、より抽象性の低い空間概念・空間表現を比喩的に援用するのは認知プロセスでは典型的な心的操作だとしている。以下では、本来的に空間を指示する場所のダイクシスが「時間」とどのようにかかわっていくかを英語と日本語を通して考察してみよう。

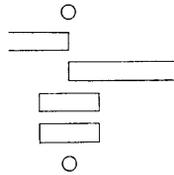
次の表は場所のダイクシスをもついくつかの時を表す表現の指示範囲を大まかに示したものである。これは時制やアスペクトとの問題が加わるとはなはだ厳密さをかくものであるが、我々が現在・過去・未来と概念的に把握している程度の三区分である。○は比較的限定の幅がせまい一時点を指し、□は時間的限定の幅が広いことを示している。

話し手の心理的勢力範囲にあるものを指示する近接表現・近称が発話時を指示しうるのは当然といえるかもしれない。注目すべきは、(i) それ以外は発話時を指せないということ (ii) 近接表現・近称がいずれの時も指しうるということ、(iii) 非近接表現・遠称は過去しか指せないということである。

(i) ある局面では近接表現・近称は話し手に関わり、非近接表現・中称は聞き手に関わるが、聞き手も発話時に存在するわけであるから、この場合その図式は成り立たない。保持されているのは話し手と発話時の結びつきだけである。つまり、話し手 / 聞き手 = 近接表現 (または近称) / 非近接

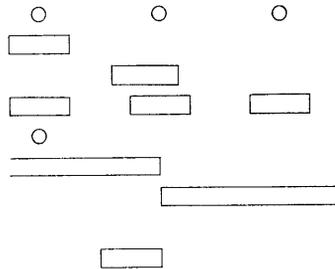
	過去	発話時	未来
〈英語〉			
this time	○	○	○
before this	—————		
after this			—————
these days		———	
these 30 years	—————		
this Friday	○?	○	○

at that time  
before that  
after that  
in those days  
?those 30 years  
(on) that Friday

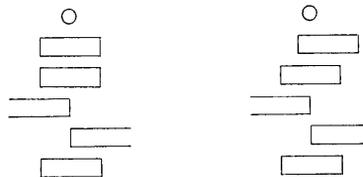


〈日本語〉

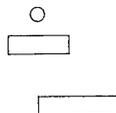
この時  
この頃  
(このごろ)  
この間  
(このあいだ)  
これまで  
これから  
\*このうち  
ここ 2 週間



その時  
その頃  
その間  
それまで  
それから  
そのうち  
\*そこ 2 週間



あの時  
?あの間  
\*あれまで  
あれから  
\*あのうち  
\*あそこ 2 週間



(または中称)という関係には現れにくい話者中心性がここでも明らかになるのである。

(ii) 場所のダイクシスの使いわけは物理的というよりは心理的な距離にもとづいているが、この現象は一見話し手の勢力範囲外と思われがちな過去・未来を言語内的、心的世界の主として話し手はその勢力範囲内におさめることができるという話者中心性を表している。近接表現・近称を用いて、話者はかなり自由に視点を移動させることができる。

(iii) この問題に関しての近 / 非近 (遠) の対立は「手のとどくもの」 / 「とどかないもの」という対立である。未来は不確かではあるが手のとどく可能性はまだある。(ii) の近接表現・近称が過去をも指示しようという現象から、非近接・遠称はもはや手のとどかないものという話し手の態度の表明であると考えられる。英語の仮定法過去は内容的に現在と結びついていながら、話し手の力ではどうにもならない事柄を過去形の動詞を用いて表すが、それは「手のとどかないもの」という点で心理的な類似性がある。

## 5. 感情的ダイクシス

Lakoff (1974) は「感情的ダイクシス」として ‘this’ と ‘that’ の興味深い用例をあげている。ここではその中から ‘that’ の例をひとつあげて考察してみよう。

(20) A : How's that throat?

B : {\*That/This} throat's better, thanks.

A は聞き手である B の疾患について尋ね、B は A の ‘that’ に対して一人称的な ‘this’ で答える。Lakoff (*Ibid.*) によればこの ‘that’ は話し手が非近接表現を用いることによって、自分の立場から離れて相手の状況に入りこんでいることを表し、それによって話し手は聞き手に対する親愛の情を表すことになるという。例えば、

(21) How's your throat?

では、話し手がその疾患は自分のものではないということを表明してしま

い、聞き手に対して距離をおくことになる。

これに対して安藤 (1986) は (20) の A は指で示すしぐさを伴うこともありうるわけだから、正当な外界指示用法だとしている。これはダイクシスを「縄張り」という概念を用いて説明しようとしたもので、‘that throat’ とたずねられた人は「のど」が自分の縄張りにある以上、‘this throat’ としか答えようがないと彼は主張する。たしかに、(20) の ‘that’ は指示的な機能が保持されている。が、ここで問題なのは ‘this’ と ‘that’ の対立ではなく、‘your’ のかわりに ‘that’ を用いているという点であり、‘that’ / ‘your’ の対立こそ問題なのである。この ‘that’ のもたらす親密さを聞き手が拒否したければ、‘My throat’s better.’ と答えることも可能ではないだろうか。また、Curme (1931) は称賛 / 非難、快 / 不快を表す指示代名詞として ‘this broad land of ours’, ‘that kind wife of yours’, の例をあげている。安藤 (*Ibid.*) が指摘するように、これも積極的に快 / 不快、称賛 / 非難を表しているのは ‘broad’, ‘kind’ という評価形容詞であるが、‘our broad land’ ‘your kind wife’ との対立を考えれば指示代名詞が感情的に用いられるのは疑いのないところだろう。

日本語の例を見てみよう。

- (22) a. この野郎!  
b. \*その野郎!  
c. あの野郎!

(22a) は聞き手に対する罵倒、(22c) は第三者に対する罵倒である。無標項のソ系はこの感情的な表現では用いられない。(20) (21) と比べてみると英語の感情的なダイクシスは近接表現が話し手の領域、非近接が聞き手を含むそれ以外の領域を指示するという認知的な用法の指示体系を保持しているが、日本語ではコ系は聞き手を指示することになる。

- (23) a. このー！ 憎いよ！  
b. \*そのー！ 憎いよ！  
c. \*あのー！ 憎いよ！

(23) の例ではソ系だけでなくア系も用いられない。ここで日本語では典型的にコ系が感情的に用いられるとするのは危険だが、少なくとも有標的な感情表現に対して中称が無標的に用いられるということは言えるだろう。

さて、指示詞がなぜ感情的な意味合いをもつかは非常に難しい問題であるが、次の例はそのヒントを与えてくれるかもしれない。

(24) This Henry Kissinger really is something!

(25) He kissed her with {this / an / \*the} unbelievable passion.<sup>10)</sup>

Lakoff (*Ibid.*) によると、(24) では指示と指示物との関係が推論的となり、(25) では ‘this’ を用いると話 (narrative) に躍動感を与えるという。注目すべきは (24) で ‘this’ が固有名詞につき、(25) では普通、不定冠詞しか起こらないところに、‘this’ があるということである。固有名詞は一般的には指示代名詞などなくてもそれと同定できるものであるし、普通不定冠詞が起こるところといえば、本来的には指示的な要素を受けつけない語環境であるはずだ。このような位置に置かれた指示代名詞はいわば余剰の部分であり、命題の中心以外の部分である。(20) にしても ‘your’ を用いれば、指示詞の力を借りずとも、どの ‘throat’ かは同定できるのである。情報上余剰であるということがダイクシスに新たな役割を与え、感情的な表現になると考えられる。

## 6. ダイクシスと「人」

これまでたびたび触れてきたように近接表現、近称は話し手の領域にあるもの、非近接表現は、聞き手を含めたそれ以外のもの、中称は聞き手の領域にあるもの、遠称は話し手と聞き手の領域外にあるものを指示する。しかし、注意しなければならないのは、話し手や聞き手などの「人」の領域を指示するのであって、「人」そのものを指示するのは比較的特殊な用法であるということだ。Quirk, *et al.* (1985) によると

(26) ?Is she going to marry *that*?

(27) Is she going to marry *that man*?

のうち、(27) のように言うのが適当である。指示代名詞が単独で人を指すと侮辱的になるからである。ただ、人を紹介する時、主語として用いる場合はその例外となる。

(28) *This is Mrs Jones.* [人を紹介しながら]

(29) *That's my stepmother.* [写真を指して]

「～する人たち」「～するもの」という表現の‘*those who*’や‘*that which*’(ややまれ)は許されるが、‘*that who*’は許されない<sup>11)</sup>。

日本語においても大体これと同じことが言えるが、人を紹介するときには本来場所・方向を表す「こちら」「この方」などが用いられる。ただ、身内を紹介する場合には

(30) これは私の息子です。

(31) あれは私の妻です。

など「これ」「それ」「あれ」を用いる。これは英語と同じように侮辱的な表現となるから、日本語では身内を低める敬意表現となる。日本の社会的対人関係上のルールの反映とみてよいだろう。英語では身内か否かは問わない。

次に、英語の三人称の人称代名詞と日本語のソ系について考えてみたい。

(32) *Mother looked at me with tears in her eyes.*

(33) *On his arrival in the capital, the Secretary of State declared support for the government.*

(32) の‘*her*’は‘*Mother*’, (33) の‘*his*’は‘*the Secretary of State*’を指している。これらに対する日本語としては次のようなものが考えられるだろう。

(32)′ 母は目に涙を浮かべて私を見た。

(33)′ 首都に到着してまもなく国務長官は政府を支持することを表明した。

どちらの場合も ‘her’, ‘his’ に対応する訳語は見当たらないが全体としては全く自然な文である。それに対して

(32)′ 母は彼女の目に涙を浮かべて私を見た。

(33)′ a. 彼が首都に到着してまもなく国務長官は政府を支持することを表明した。

b. 国務長官は彼が首都に到着してまもなく政府を支持することを表明した。

(32)′ はやや不自然だし、(33)′ a. の「彼」は「国務長官」を指せないの  
で、誤訳ですらある。英語は日本語よりも後方照応を許しやすいという統  
語的な制約の違いを考慮して (33)′ b. としてもさほど変わりはない。柳  
父 (1982) が主張するように英語の三人称の人称代名詞と日本語の「彼」  
「彼女」とは別物で、日本語では「彼」「彼女」はむしろ指示代名詞なので  
ある。なお (32) に関しては

(32)′′ 母はその目に涙を浮かべて私を見た。

のように (32) の ‘her’ には「彼女」よりもむしろソ系が対応しやすい。  
(32)′ でゼロ対応しているのは (15)-(16) と類似の現象と考えられる。無標  
項のソ系が英語の特に所有格の代名詞に対応しやすいのは、楳垣 (1975),  
Quirk et al (*Ibid.*) にあるように英語の所有格の代名詞が冠詞的な役割を  
果たし、それほど強い照応性がないからであろう。

## 7. ダイクシスをもつ動詞の含意

### 7.1 ‘come’ / ‘go’ と「イク」/「クル」の認知的意味

(34) come here

(35) come there

(36) \*go here

(37) go there

‘here’ は話し手の領域にある場所、‘there’ はそれ以外の場所を指示する

というこれまでの議論からすると、*deictic verbs* と呼ばれる ‘*come*’ と ‘*go*’ にはだいたい (34)-(37) のような図式ができあがる。

(36) を含む文が一般に非文になるのは ‘*here*’ が話し手のいる場所を指示するのに、‘*go*’ は話し手のいる場所以外への移動を表す動詞だからである。ただ、地図のある地点を指し示して、‘*I will go here.*’ というような場合には (36) も容認可能である (同じ状況で ‘*I will go there.*’ も可能)<sup>12)</sup>。その場合、話し手は実際に発話の場所から離れた場所への移動をするのを ‘*go*’ で表すが、到達点は目の前の地図上にあるため心理的に勢力範囲内におさめているのである。これは確かにごく限られた場面での発話で、他の文献と同様ここでも容認不可能という扱いをするが、言語(ここではダイクシス)が現実の世界を忠実に反映しているわけでは必ずしもなく、話し手のフィルターを通して表されるという、これまでも述べてきた話者中心性を示す好例として注目しておく価値がある。

さて、話し手と聞き手の位置するところと関わる認知的な ‘*go*’ の使用条件は、発話時にも到着時にも話し手が到達点にいないことである<sup>13)</sup>。一方 ‘*come*’ の使用条件に関しては Fillmore (1972) は次の4つをあげている。

- (i) 話し手が発話時に到達点にいる。
- (ii) 話し手が到着時に到達点にいる。
- (iii) 聞き手が発話時に到達点にいる。
- (iv) 聞き手が到着時に到達点にいる。

簡単にいえば、‘*come*’ は「会話の参加者が近接的に認知する範囲内での主語の移動」であり、‘*go*’ は少なくとも「話し手が近接的に認知する範囲外の主語の移動」と言うことになる。

(38) I'll *come* to your office.

(39) I'll *go* to your office.

(38)-(39) がともに聞き手が発話時に ‘*your office*’ にいるとするなら、(38) が正当な礼儀正しさをもった表現になるのに対し、(39) にはやや冷たい事

務的な響きがあり、5. で論じたような感情の問題も関わってくる。

日本語の「クル」「イク」の使用条件は英語の‘come’と‘go’にかなりちかい。「イク」は‘go’の条件にほぼ一致するといつてよい。ところが「クル」の条件は先程の‘come’の使用条件のうち (i) と (ii) だけがあてはまり、(iii) (iv) はあてはまらない。つまり「クル」が使われるのは到達点に話し手がいる場合だけである<sup>14)</sup>。次の例で日英の違いは明らかとなる<sup>15)</sup>。

- (40) a. I will {come / go} there tomorrow.  
b. あしたそちらに {\*来ます / 行きます}。
- (41) a. I {came / went} there yesterday.  
b. きのうそちらに {\*来ました / 行きました}。
- (42) a. John will {come / go} there at 6 this evening.  
b. ジョンが今晚 6時にそちらに {\*来ます / 行きます}。
- (43) a. John {came / went} there yesterday.  
b. ジョンがきのうそちらに {\*来ました / 行きました}。

## 7.2 Deictic verbs の非認知的表現の含意

英語の‘come’は発話の中心となる話し手、もしくは聞き手の方に向かう移動を意味し、‘go’は話し手から離れていく移動を意味するということになる。deictic verbs はそういうところから派生して移動というより状態の変化を表すことがある。それはまた話し手と聞き手の心理的近接性とも関連してくる。さらに、この動詞が非認知的に用いられた場合そのいくつかには含意するところ (implication) に興味深い共通点がある。

### (A) 心理的近接性 (mental proximity)

- (44) This car *comes with* or *without* a convertible top.
- (45) These ornaments *go with* this lot of a sale.

(44) (45) はともにある商品が付属物として何かがついているという意味を表すが、(44) は心理的な視点を買い手においているのに対して(もしくは買い手の発話)、(45) の視点は売手にある。

- (46) It's *going* green.  
 (47) It's *coming* green.  
 (48) How's your paper *coming*?  
 (49) How's your paper *going*?

(46) (47) は色が黄色から緑に変化するさまを描写しようとしたものだとすると、話者の視点が前の黄色にあれば (46)、緑にあれば (47) を選択するであろうし、(48) (49) は論文の進み具合について尋ねたものだとすると、終が近いことを知っていれば (48) が (49) よりも適切であろう<sup>16)</sup>。

(B) Deictic verb の含意 (implication).

deictic verbs はイディオムとしてさらに抽象度の高い状態の変化を表すことがある。

(i) 'come' = 正常な状態への変化 / 'go' = 正常ではない状態への変化  
 これまで「話者の視点」と呼んできたものを Fillmore は一連の論文<sup>17)</sup>で deictic center と呼んでいるが、さらに Clark (1974) は deictic verb を含むイディオムの解釈はこの deictic center がものごとの正常な状態であるという事実によって支配されているとしている。つまり 'come' は deictic center への移動を表すから、イディオムでは正常な状態への変化という implication をもち、'go' は deictic center 以外への移動を表すから正常ではない状態への変化ということになる。

- (50) Mortimer *went out of his mind*.  
 (51) Lovelace *came back to his senses*.

(50) は正常でない状態への変化、(51) は正常な状態への変化を示している。英語にはこのようなイディオムがかなりあるが、さらに deictic verb のこの性質をはっきりと表しているのは次の例だろう。

- (52) Duncan's temperature *went* down today.  
 (53) Duncan's temperature *came* down today.

(52) (53) はいずれもダンカンの体温が下がったという内容だが、(53) が

平熱に下がったことを表すのに対し (52) は平熱からそれ以下に下がったことをあらわす。‘come’ と ‘go’ の implication の差が明確に現れている。次の例でも正常な状態でなくなる場合には ‘come’ は用いられず、逆に正常な状態に戻る場合には ‘go’ は用いられないことがわかる。

- (54) John *went into a coma* yesterday.
- (55) \*John *came into a coma* yesterday.
- (56) John *came out of the coma* yesterday.
- (57) \*John *went out of the coma* yesterday.<sup>18)</sup>

(ii) ‘come’=完成・成長・実現など / ‘go’=破滅・破壊・消失など  
正常 / 非正常からさらに発展して、上のような implication をもつ。

- (58) The butter *came* quickly.
- (59) The roof *went*.

(58) はバターができたこと、(59) は屋根が壊れたか飛ばされたかでなくなってしまったことを表わす。

- (60) The dream of yours might *come true* someday.
- (61) He *went bald*.

(60) は夢が文字どおり「実現する」という意味をもつ。これは必ずしも好意的なことが実現することを表わすばかりではないが、好意的なことの方が多い。一方、(61) は好意的ではないことへの変化を表わしている。

ところで、Clark (1974) や Dillon (1977) らは例えば (61) で「はげ」が好ましいものであるというコンセンサスのある集団のなかでは ‘come bald’ も可能ではないかという仮説をたてている。原話者のそれに対する反応は ‘strange’ だそうだが<sup>19)</sup>、これはおそらく ‘come’ と ‘bald’ の語結合そのものの不自然さからくるのではなく、‘come’ のもつ今まで述べてきたような implication と ‘bald’ のもつ非好意的な connotation との結びつきの不自然さからくるのではないかと思われる<sup>20)</sup>。

日本語では動詞をそのまま用いるとその意味ははなはだ概念的とな

る<sup>21)</sup>。「走る」/「走ッテイク」・「走ッテクル」のように移動を表わす動詞では特に「テイク」「テクル」という表現を用いて deictic な要素を表現する。英語のような *implication* は一般的には見られないが、このような表現でやはり心理的な近接性、さらには一体感を表わすことがある。

(62) 今日君のところに誰か訪ねてこなかった？

(63) 今日君のところに誰か訪ねていかなかった？

(62)の方が「君」と話者との一体感がある。(63)は「君」と話者が分離していることを暗示するばかりでなく、「誰か」が話者側に属する人物であることを示す可能性すらある。

さて、日本語では(38)(39)のような場合、前にあげた使用条件からいって「イク」/「クル」の選択の余地がないわけだが、そのことと今のこの「テイク」/「テクル」とには関連があるようである。日本語には英語のような意味での主語がしばしば省略されると一般にいわれるが、その分、敬語や「ヤル」、「クレル」、「モラウ」など行為主体を暗示するような表現が多い。英語の‘come’, ‘go’に比べて日本語の「イク」、「クル」の使用条件が限られていること、そして一般の動詞にも補助的に「テイク」、「テクル」の *deictic verbs* を加えることはそのような日本語全般の、動詞によって行為主体を暗示する傾向に合致したものと思われる。

## 8. 結論

我々は外界をさまざまな形で認知している。言語は嘘や空想の物語を造り出すことができることから知られるようにそれ自体独立した世界を築くことができる。たしかに言語の体系自体は原理的には恣意的であるが、話者と外界とが直接の関わりを持つダイクシスはおそらく間違いなくどの自然言語にも存在するであろう。その意味では、ダイクシスは言語の非恣意的特性と見てよいと思われる。これまで、話者こそが話者の認知する言語的世界の中心であるというまぎれもない事実からくる様々な現象を見た。ダイクシスは話者中心性がもっとも顕著に現われる言語的特性で、我々は

それを慣用とし、半ば無意識下においているのである。それゆえ、このような現象はかなり普遍的に見られると考えられる。言語の普遍性の問題がしばしば議論される昨今、本論もそのような研究の一環として位置づけられるだろう。また「何かを指示する」ということは当然「指示する」誰かの存在を前提とするが、これは究極的にはすべての「発話」が「発話する誰か」を前提とするところから言語の様々な面で話者中心性、さらに主観性の問題と結びついてくるのではないかと考えられる。ダイクシスは言語外的世界と結びついている分だけそれが明確に観察できる言語事象なのである。

#### 註

- 1) 服部 (1968, pp. 71-80)
- 2) また、同じ二分法または三分法といってもその対立の仕方はどの言語にも共通であるわけではないが、ここでは英語と日本語以外の言語に関しては深入りしないことにする。
- 3) しかし大槻のような考え方が必ずしも誤っているわけではない。我々は自分に近いものと遠いものがあり、さらにその中間に位置するものがあれば大槻のような呼び方をすることは十分ありうる。重要なことはこれらの対立の場を限定することである。そうすれば久野 (1973, pp. 185-190) のように既知 / 未知という対立がア系 / ソ系にあるという考え方も可能であるし、森田 (1980) の定義づけはそういう意味では的確である。
- 4) 例えば、‘tall’ と ‘short’ との対立は、‘How tall is he?’ という身長を尋ねる疑問文においては中和され、‘tall’ は中立的な無標項として用いられる。
- 5) 本論を通して、例文や表現の前に付せられた \* はそれが容認不可能なものであることを示し、? はややおかしい表現であることを示す。
- 6) this morning / that morning などの対立もあるからこれはむしろすべてに言えるわけではない。その他の例としては、this time / at that time などがある。
- 7) 単数主格
- 8) proximal, distal という用語は一般に、二分法、三分法のどちらの指示体系でも用いられるが、前述の通り「価値」が異なるから注意を要する。
- 9) 関西地方の方言には「ここ」「そこ」「あこ」という対立がある。
- 10) 例は Lakoff (*Ibid.*)
- 11) 代わりに ‘anyone who’, ‘the person who’ や古風だが ‘he who’, ‘she who’ などを用いることになる。複数の ‘those who’ が許容されるのは興味深い。
- 12) Fillmore (1970)
- 13) Fillmore (1972), 大江 (1975, とくに p. 14 の脚注)

- 14) Fillmore (*Ibid.*) 大江 (*Ibid.* p. 18.)
- 15) 例文は大江 (*Ibid.*)
- 16) 田中 (ed.) (1987)
- 17) Fillmore (1966, 1970, 1972)
- 18) (50)~(57) の例文は Clark (1974)
- 19) 田中 *Ibid.*
- 20) 安藤 (*Ibid.*) も指摘しているように, ‘come’, ‘go’ のイディオムが含意するもののすべてがそれぞれ共通するわけではない。‘The door came unhinged.’ では「正常な状態への変化」とは決して言えないし, ‘The bad dream came true.’ のような例もあるから必ずしも「好意的な状態への変化」とも言えない。安藤 (*Ibid.*) のような「縄張り理論」を用いた統一的な説明は確かに可能だが, 同じ deictic verb の ‘take’ が ‘bring’ と対立する一方で, ‘give’ とも対立するように, ‘come’, ‘go’ の慣用化からくる多義性は認めざるを得ないであろう。
- 21) 森田 (1977)

#### 引用文献

- 安藤貞雄 (1986): 『英語の論理・日本語の論理』 東京: 大修館
- Clark, E. (1974): “Normal states and evaluative viewpoints” *Language* 50, pp. 316-32. Baltimore, Md.: Waverly Pr.
- Dillon, G. (1977): *Introduction to Contemporary Linguistic Semantics*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall.
- Fillmore, C. J. (1966): “Deictic categories in the semantics of *come*.” *Foundations of Language* 2, pp. 219-27. Dordrecht: Reidel.
- (1970): “Subjects, speakers and roles.” *Synthese* 21. pp. 251-74. Dordrecht: Reidel.
- (1972): “How to know whether you are coming or going.” *Descriptive and Applied Linguistics* 5, pp. 3-17. Tokyo: I.C.U.
- 服部四郎 (1968): 『英語基礎語彙の研究』 東京: 三省堂
- 久野 暉 (1973): 『日本文法研究』 東京: 大修館
- Lakoff, R. (1974): “Remarks on *this* and *that*.” *Chicago Linguistic Society* 10. pp. 316-32. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- 森田良行 (1977): 『基礎日本語 1』 東京: 角川
- (1980): 『基礎日本語 2』 東京: 角川
- 大江三郎 (1975): 『日英語の比較研究』 東京: 南雲堂
- 大槻文彦 (1900): 『広日本文典』 (第12版) 東京
- Piaget, J. & Inhelder, B (1963): *Child's Conception of Space*. (tr. by F. J. Langdon & J. L. Lunzer) London: Routledge & Kegan Paul.
- Quirk, R., et al (1985): *A Comprehensive Grammar of the English Language*.

New York: Longman.

佐久間鼎 (1951): 『現代日本語の表現と語法』 東京: くろしお出版

田中茂範(編)(1987): 『基本動詞の意味論・コアとプロトタイプ』 東京: 三友社

Traugott, E. C. (1975): “Spatial expressions of tense and temporal sequencing: a contribution to the study of semantic fields” *Semiotica* 15, 3. pp. 207-30.  
The Hague: Mouton.

Tsuji, Y. (1987): “Temporal Expressions and Spatial Metaphor” *Daito Gakuen Kiyō* 3. pp. 67-76.

楳垣 実 (1975): 『日英比較表現論』 東京: 大修館

柳父 章 (1982): 『翻訳語成立事情』 東京: 岩波